

源平盛衰記圖會

一

~ 13
3309
1

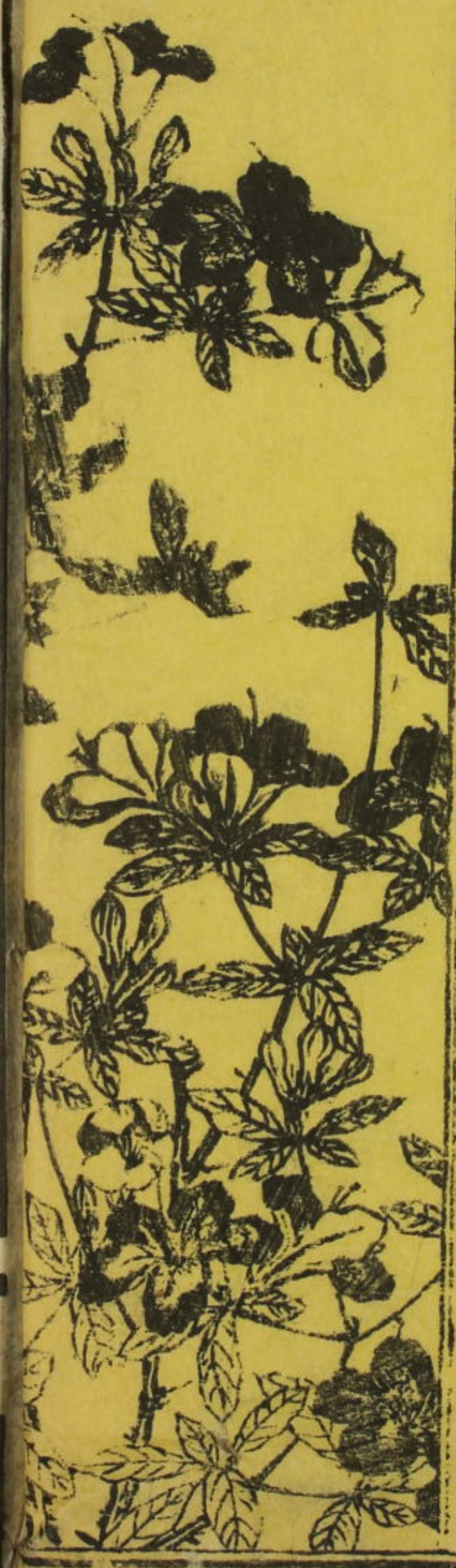


3309

龜里籬崑先生輯錄

源平盛衰記圖會

全部六冊



源平盛衰記圖會序

大正八年九月
本大學出版部

凡史冊之可觀者。石山詞章之為美實。

係文物之懿與人才之盛焉。身吾。

邦當壽永元曆間。僅數年。源氏平族一。

興一亡。俄為勝敗。賧列眉蓋。當時神文。

猶脩。而如靜海之跋扈。木曾之驕橫。小松。

之戴。王室。鎌倉之昔。私家三位之慷慨。赴。

雖判官之用兵如神其他月輪之於朝紳
文賢之於緇流乃至文武巨僚率之一時
之雋故人之泚惡事之邪正皆可以感人
心備世鑑矣此其喜談古今成敗之所以
必稱源平者而雖稗官小說理則同也前
是羅島主人嘗著京畿東海名所圖會林
泉名勝等數種咸土木大行乎世矣主人
近又叩余廬以以源平盛衰記圖會者一
編乞余序引蓋其為製也就原書彙括文
詞丹青事迹芟繁刪冗釐為六卷其工之
勤矣是編一出則俾婦人兒輩之易讀卒
卷披玩弗置遂能紙價踊貴因不談之矣
而其於人心世鑑有益果何如哉余既無
皇甫之晏之筆不能為之重故特道其喜

見... 陸離... 釣... 今... 海...

後代... 不... 是... 乃... 後... 又... 人... 口... 也...

元弘十二年癸申の事

秋里竹離 著



源平盛衰記圖會卷之壹

目錄

豐明節會
鱸魚入船
貴狐天皇守護清盛
清盛侍三百人禿
詔立二代皇后
櫻町中納言禱泰山府君
清盛命武士擊鬮白基房公車
鹿谷密謀
源三位賴政以妙策免難
時忠巡智慮鎮大衆

三卷忠盛ノ条爰工可入

此盛衰記平治元年十月
待賢門合戦源平存亡
係大合戦不書秋里
編輯愚ナリ甚シ

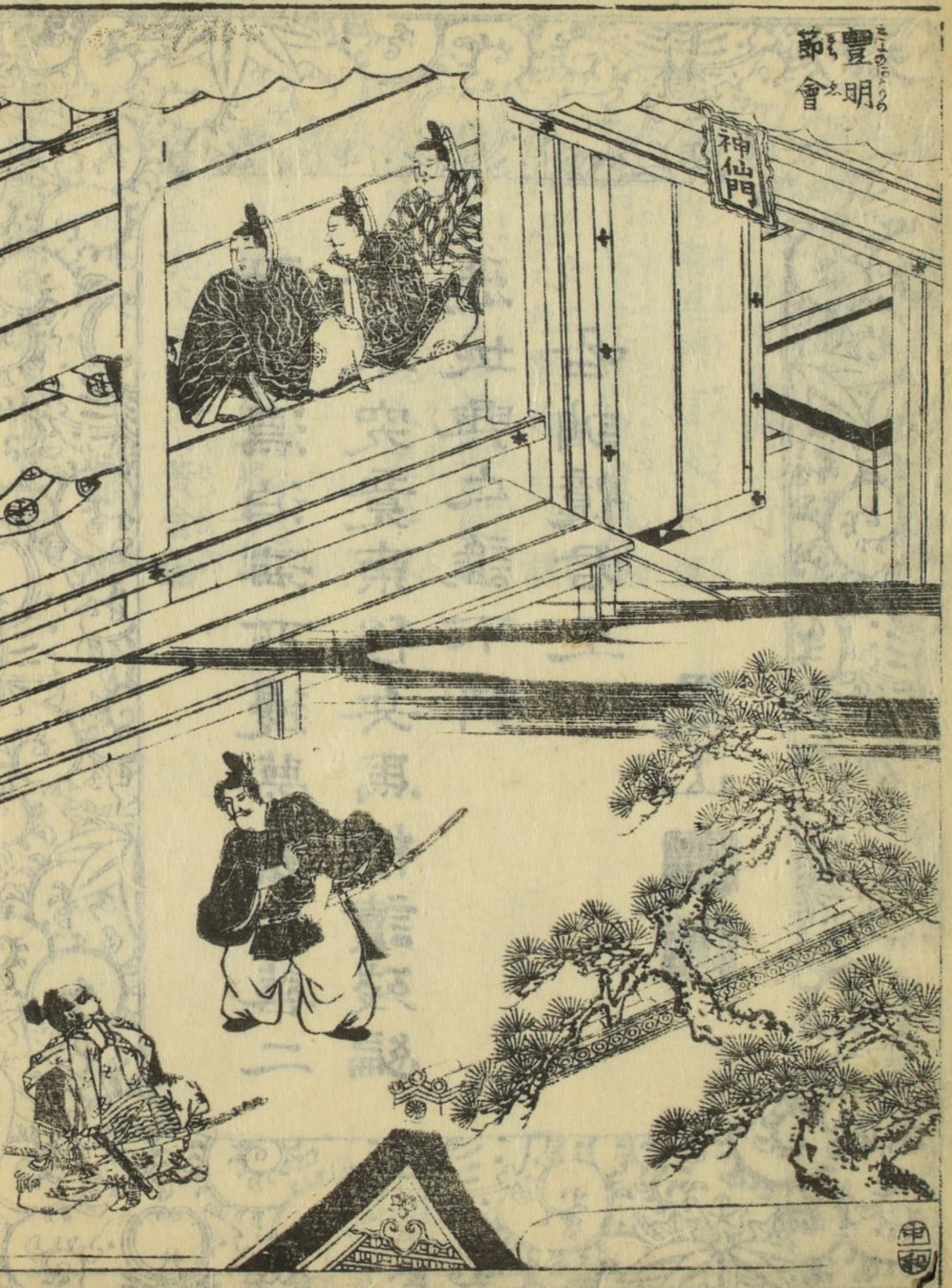
源平盛衰記圖會卷之壹目錄終
 大政入道 積惡
 安德天皇降誕
 成經康賴掃洛渡有王鬼界島
 小松大臣薨去 渡育王山黃金論
 後寬成經康賴謫遷鬼界島
 大納言成親入道他界
 小松肉大臣重盛智謀
 後白河法皇建春門院嚴鳩行
 內府重盛諫言父入道
 後白河法皇然野山行幸
 行綱依訥鹿谷密謀露顯
 源陽燒亡

龍舟漂泊海西邊夢裏紛華二
 十年究竟東移兵馬權讀殘編
 憑地興亡誰不憐
 名調憶君王

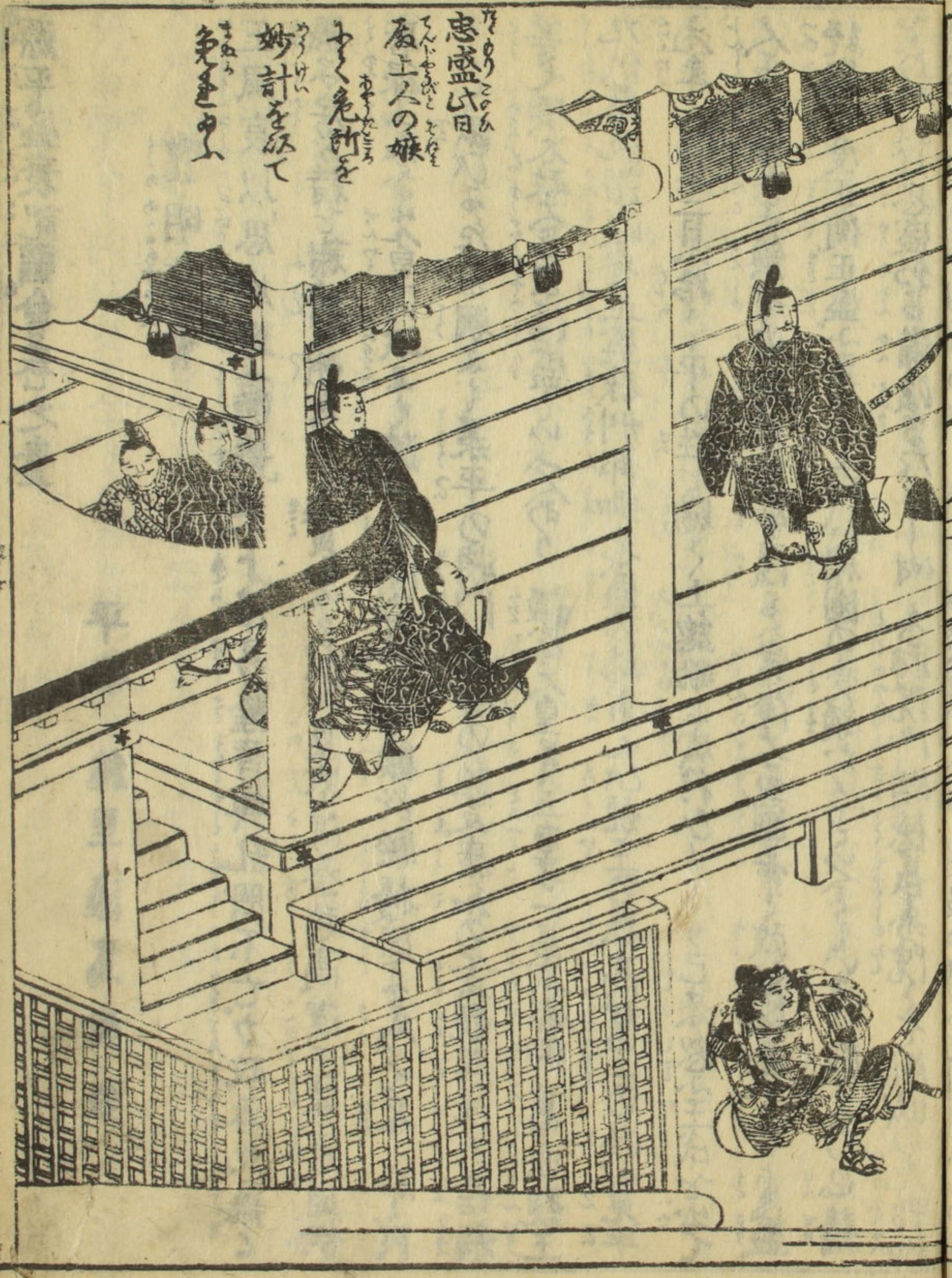
愚山 齋 齋

明豊
會

神仙門



忠盛は日
后上人の娘
をく免所を
妙計を以て
免せしむ



源平盛衰記圖會卷之壹

平安 維里 藤島 輯錄

豐明節會

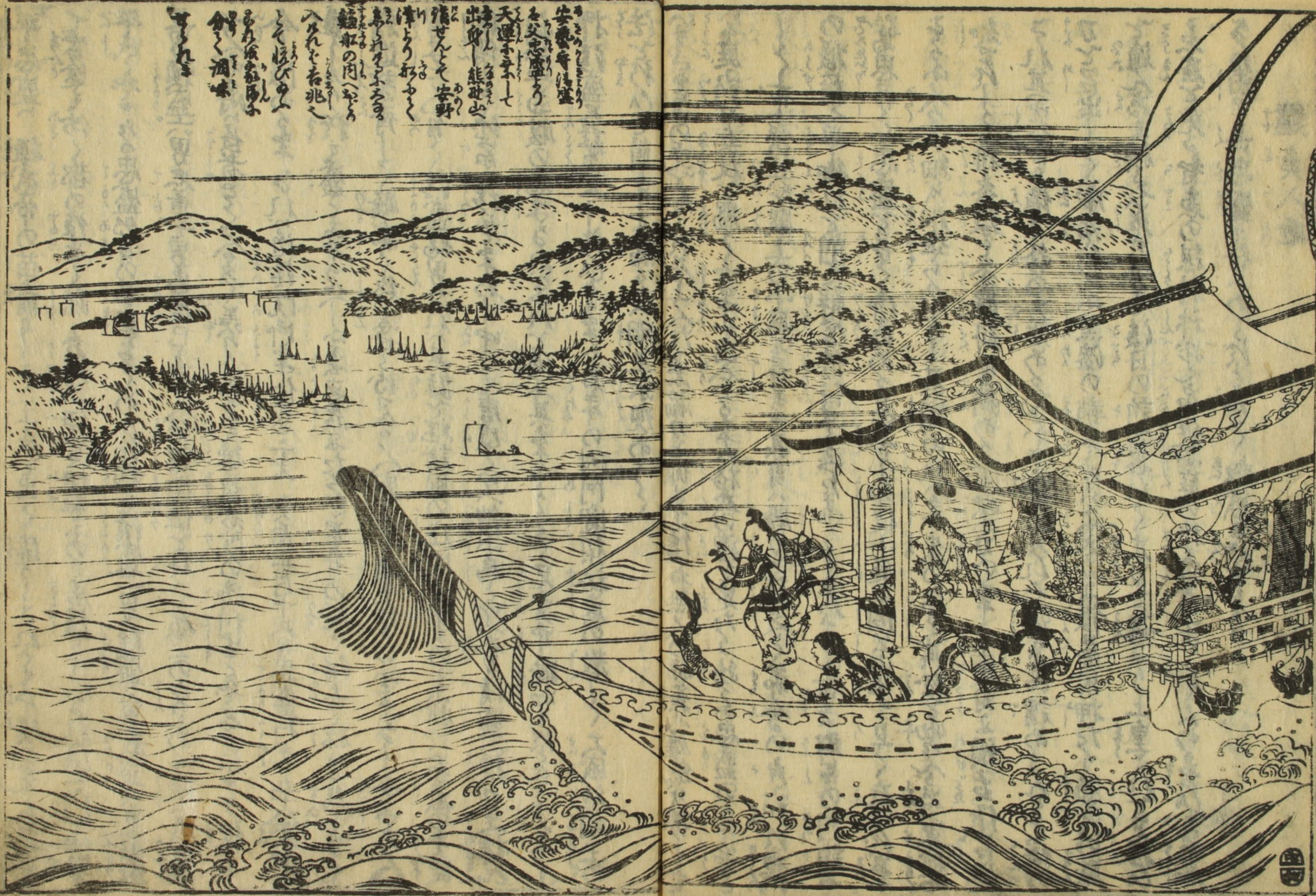
王風哀以思周道蕩無章卜洛易隆晉興亂罔不亡カ政吞九鼎と
張子房が詩と謝朓が作するも實あらずや夏寒促秦趙高漢王莽梁周伊
唐祿山みか先皇の政も隨て民間の怒も顧に騷擾連年をくぐりか
一々憾びぬる朝も兼平の將門天慶の純友康和の義親平治乃信賴
等々頃太政大臣平清盛のあり極武天皇第五皇子一兵衛御葛原親王
九代後胤頼岐守正盛孫刑部卿忠盛の嫡男といひ親王の孫高望王の時寛平
元年五月十二日平の姓を賜へ上總助に成給ひしより已奉忍小玉氏とて
人臣別其子鎮守府將軍良望後其常陸之重國番と改む國番より貞盛
經衡正度正衡正盛に至るまで六代諸國の受領たりしとていへ殿上乃他籍
と許れは忠盛朝臣備後たりし時 志保院神願徳長考院とて風城の元時河

の東日三十二間の市堂と進進して一體の觀望も不安きといひ勅賞小但馬國と賜へ
其外結縁經營の人の程を小障と勅賞と考ふ誠小又菩提とを賞たり忠盛
朝臣仲智小協入程の寺公造進一たりたり 志保法皇叔感小耐を給つた
當朝小刑部卿みほせられ大内の昇殿と許さる昇殿といふ象外の選られ俗骨
をむ事さし就中先祖高見王より其跡をくく絶たりし小忠盛二十六歳より
許されたる當朝の西日子孫繁昌の驗とてより法皇考み直へ忠盛みくは
く誰か朕とを併小成つたといふ御劍御衣或付ハ沙金錦袴と徳長考
院(田向)より多くとく下し給ひたり其上關國のありし庄園のありしを
賜らんと思はれられたるの上ノ嘲憤と議しやられたる長承二年十月廿五日朝
豐明節會のお忠盛と園封とせんを交さ區り忠盛いまま風みすく武勇の氣
小養くけ恥み違ふ平身の存家の存み心憂ふ一之けま公團とて出仕止らる
心甲斐とす所詮身と全し君み仕り忠盛とて等々兵衛尉家貞と連
て泰内せは家貞の布衣の下み為まの援卷衛府の太刀と佩烏帽子引入被

續つて殿上の小庭ふありて子息正室家長の年十七有為骨太うく剛の者めい
あれも布衣の卜日紫威の援を着て赤銅のたかを佩て無官され徐々うて左
てと上りぬく大居小成を遠く居る上方を窺く父の家貞ヤト云はれ長し討入る
走之頭守辨師後給は威人判官平時信と云く字津保柱より内布衣者候
めくは物者や事の体狼藉へ露出と云せられ家貞を主君忠盛今衣園討に
せらるるたうと若れ其様見せしむとてあつ小思て作アヤヤ云の堂上うと切
せらるるた頼魂と見たり殿上は忠盛黒鞆巻の太刀と杖束の上小横之腰の
勇健なる様ありと柄と人をあせ見せしむる殿上人は云はれ懼く其杖乃園討
ぬり多うまて五節の御遊を終らるる小退出の次少の膝を敷て太刀を抜半
の髪ふまると引出され火の光小耀とありとてうめくさう殿上の人々
あつく恐おのたる紫衣者の後ま主殿司は招を腰刀と鞆をぬた後小
ぬの平一遊は頓をさし出たり家貞主待受てい々と上り有の傳下語へ辭
えたる者あり別業と云く各のいさ五節の後御居上へ同小奏せられん忠盛
いさ上りの交とあはれ居上たる老脇刀と佩事侍若無人の振舞へ雄劔が舞
公庭の兵杖と賜く宮中を出るまへ格式の禮を定たり物ふ忠盛の弟等と
く布衣の兵と殿上の小庭は召まき其身へ腰刀と横と希命の杖に
の狼藉へ早御礼と削て解官停住せたりとやせり上皇は群臣の列討ふ
驚恩を忠盛と云くゆめある其各小布従小庭は同の事具く存る
さうふん子細相企らうと其圖あり年朱の家人其程と助へる
知てよく推察致と条罪科を断るへ小刀の事主殿司は頓を作召出
され其家召は依り替のた右めとさかや奏しられを供具其謂ありと
刀と召出しく敵湯のふ黒漆の鞘を中へ小太刀は銀箔紙押たり湯の
と通んおは様と云はれは後日の新と恐れ小刀を搦り上皇は
まを智恵の謀計汁ゆへ希従小庭の推察致まの家人の
る由上へ忠盛が外あはれと却て敵感は頓と云

鱸魚入船

安野守清盛
を父と尊ぶ
天運未一
出陣熊野
清盛と安野
津よりおちく
舟にのりて
入るる北
とてほび
舟にのりて
舟にのりて
舟にのりて



清盛の討
 運野を待たる小
 太も形を物に出
 狐女と化し入
 我命を助め
 沢系守と
 と幸ひ
 貴狐天王と
 形れ方
 清盛
 めれを
 信と
 所れを
 同小活
 業の

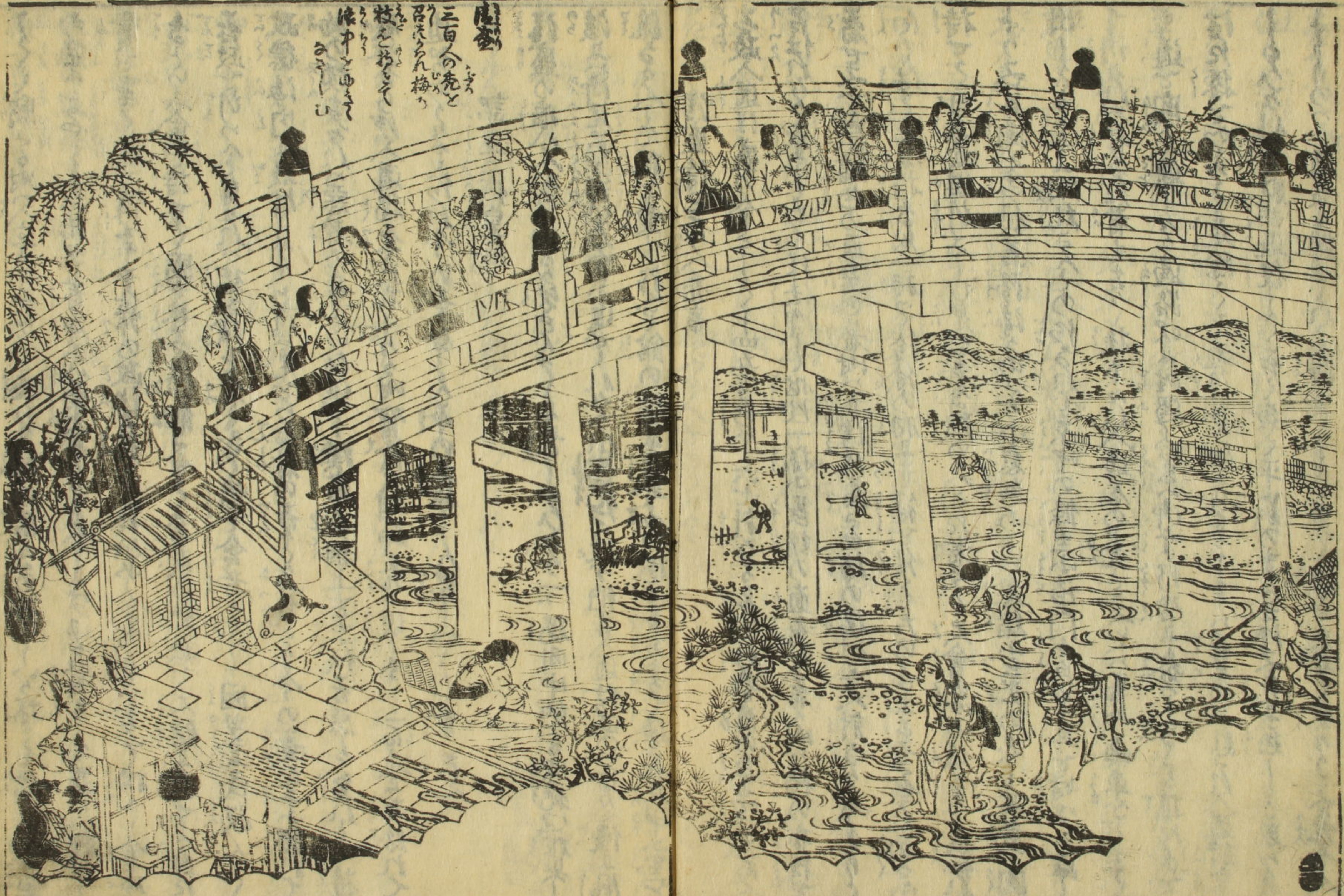


元年小正二位みく春議とある同二年小右衛門督檢非違使別當權中納言
位下長寛二年小権之絶言其仁安三年其内之官兼小位下直前兼兼權中納言
まねれどもあれ忠義の例を國一同二年小太政大臣上るた右と経てて公位其
まの事九條大相國信長公の外先蹤あり之將あり終るも兵杖賜隨身成百具
しく執政のふれぬ一輦車小兼て宮中と出合を備ふ事内内儀公之公政官の
訓導の禮を儀刑の寄添を地勢をたとも賢者定ん其仁にまぬまぬ
天才為しつとも政理明らつたれ其器小あり其人非非して懸へ官あり
とも一之安危身由萬機の理乱學ありたり子細及た一門の親族入國を賜り
一系の階級を九代先蹤と載者後日坊兼花月小熾えたる小信盛仁安三年十
月十日齡五十一あり、事病小侵るん存命の爲小判發は法名公孫海と名の具
驗や富高立所小念く天命と全に威勢小惶き世の人從ひ有平風の足
草と鹿かき、あのみ世公國に小異さるるまに六波羅の親族公達とみくを
た族も英其も面公向へ肩と双ぶる人ありたり

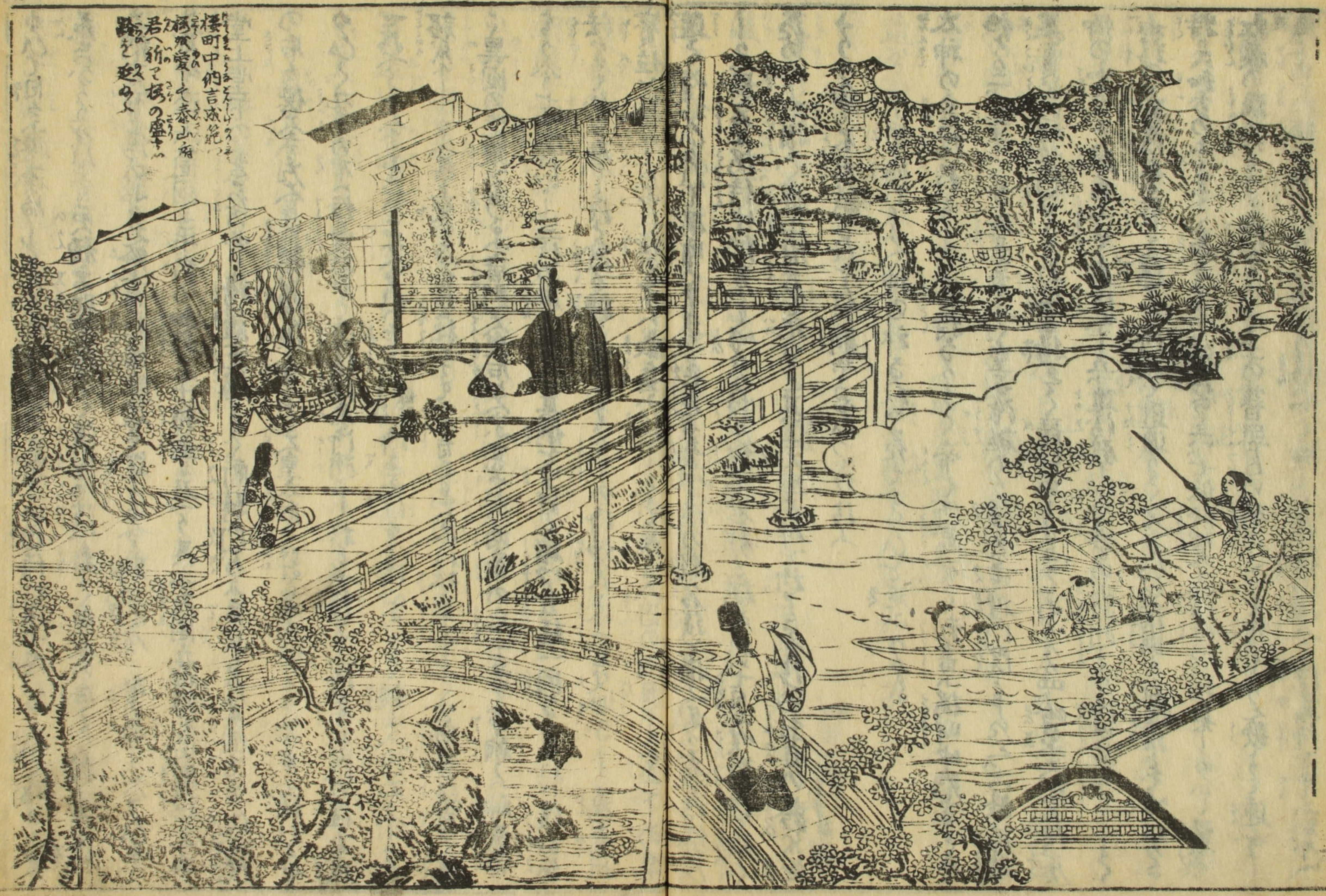
信盛侍之百人先章

と政入道信盛の令とく十四五の計する先の髪と背の白四と高
尺はれり重まめは法師と形は一樣小長緒の直密は着る時楊の布袴を
着て又一色小緋の直密と著る時赤袴は着る梅の裾は二尺計るるなりと
向くは右手持ちか一羽の鈴付の羽赤符と付きたのよまをそと面を
持てて日毎且遊りさむ是は重者頭のふり者そと大會宴の味重と眞實
より又耳聞とるは若路海ありふ意意ありふ忽緒ふ云老のふ其者之面
出しくや上相糾さんとのゆるんを京中の條里小洛門々戸々小耳と時を
て清くは外なる者も多く扶ト入道及の先と之の馬牛乗車かとも
道と聞て通るる適路及び性過く案に清き仔細も合する攝たも
はた孫とかりて走除くを過りたる先等やまの若急公糾り入道計り
しゆんは其賊共追従しく若も悪く平家のまへ云は又先も悪く思ひ
さりの入道及は謀せられり科るくも多く扶どる者も有るる先を人

園遊
三百人の衆と
召はるん梅
枝をおろし
依中とゆき



櫻町中納言成徳
御愛を奉る
君新て松の葉
踏を返ゆ

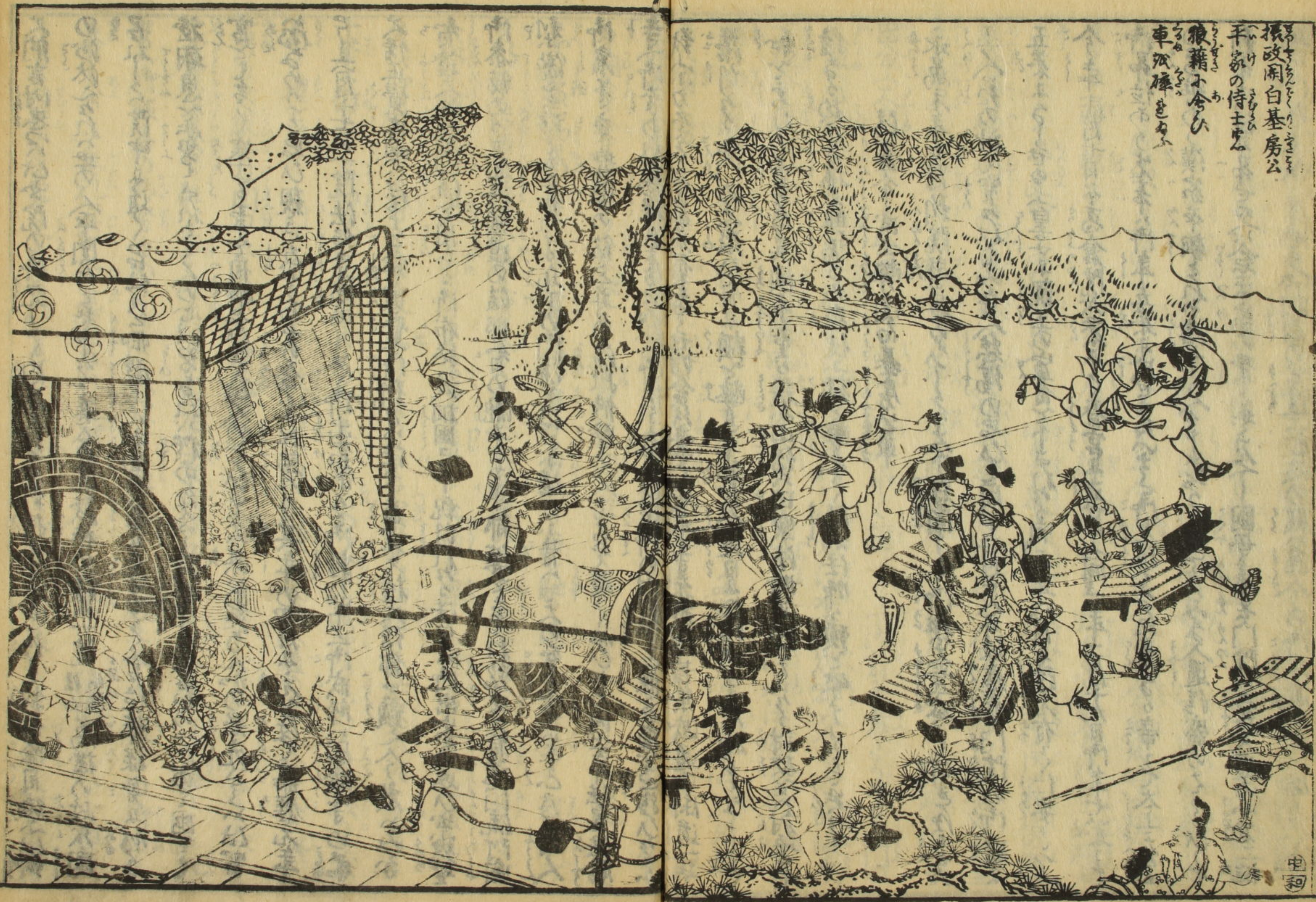


かひて曰ふ傳授ゆしくなりて安藝の老考の内侍に後主を八分位に擢るる才
藝にかうりたるも更願者肌世持とて後白河院に奉る更後の后よりかうりたるハ
之納言有居つたのち方公書に後主を遣はし新二門を築思ふたすひり
と日本二十六箇國を平家の如く二十箇國及び其上を國五百餘を國數とて
堂上堂下の事たのめく綺羅充滿しく斬騎の多かるは其願を帝邊湯院
の后に徳寺を公徳の庵の中宮とて皇太后を尊とせむひりたるは奉ふ後れを
かひく九事の中は後主思ふく通湯河原所を移らむ後主を平年廿七人の得も成
て後主とて下すの英令の主上七十八代清和天皇を御心ありく頼朝入内ありてそ
頼朝下り其其父の右大臣公徳とて宣旨ありて公徳は平年二十く公卿會議有て選
異國の先蹤と考ふる唐則天皇后とて宗高宗の兩帝の后ふ事奉朝入神武帝
より今七十餘代とて二代の后ふ事其例と定むと諸は會議一同ありたるは後白河
法皇も然るありはとた之諫をせむと主上の御心ありて天子母あり一萬葉に
實位と殿人上とあれ後主の事ハ嚴重不任とて院入内の時日とて宣下あり
たり早具目も成しくは后と御車も召れは湯院夜とめされど白河院後主とれ
内(奏)入各後主恩公世勢と御系後主を汲むせむひりたるは後主の兩後とてハ
朝政と勅をせ給ふかの紫は後主とて御賢を降子とせられ西廿十六人東十士以
の名は後主書せりは名臣の列名ハ東の水ハ西の氷ハ清涼なるは長足長馬形降子鬼間孝
將軍の體と換せる降子とあり金圖を書る荒海降子昆明池降子具ふる降子
よ遠山の有明の月とて書れは近湯院末幼帝とてわたりたる時何とては降子
よさみ書書里とせむひりたるは有るよさみとてりたるは降子とてりたるは先朝の首とて
しく思ふは人心の中所とて思ふはけとせむひりたるは痛くはれ
也ひさやうの身ふりくふりたるを同一とて廿月の月とてんん
時水萬元年の春は頃より主上御不祿ありく其年の夏は初より年の外もとせ
給ひはれたる大輔兼盛の娘の後主二茶母とせむは皇太子はしくとて皇太子よとせむ
とて由りて六月廿日御親王の宣旨と下され頼朝其位と譲とせむひは同日廿七日
よ大極殿より新帝御即位の式ありしは同日七月廿日其宣旨法中御驗者よ奉る

橋中より新邪氣始々然れく讃岐院の浄靈を中なる遊且同廿八日新院出れ
さるひより浄聖齡廿二と聞一八月七日浄葬送ありく夜並置みく茶毗
一なる今年の夏時より赤中布衾を充満く頻り郡を味たりいさひ初者本丸
もくく浄山にありく浄ありくありき今今異な来くさく今身成時を極あり
たり二羽の郭をさく喰合ひ後上の棟小飛落り野を空み入るに主人將也
去んとする本文ありあれ怪異とく討者と捕く獄を禁らる新院浄葬送の表
延曆興福の両寺は又衆部經の場は額お論く根積及び南都の觀者房皆至
房長刀を延曆寺の額と二刀切く我と思え者落合やくと旬く馳廻れども
出合ふ衆をさく二人獲りやみゆり浄の水と謳へく一討計をさくり山門の
又衆は和成者んぬ興福寺の末寺され浄東清水寺焼拂りく西坂寺
下松今道教をさく清水院時尾觀者さく攻奪り清水法師と思ひ切く
楯の面は進歩く教を以て然ひたりと云處のゆあるを勢ありたり上り別於板
さく額て坊舎小火成然り折并西風烈く黒煙東に覆ひたり寺傍今防
執不力そく宗廟公員奉くせ坊舎は盡く延年寺赤染地若集滅道の閑道一兵
落りたり山門の又衆は七日額を奪り和成今五日は清水寺は焼やみく
和と名じと勇々其須承堂を談小山僧田樂法師似たり討敵と討返を
傍る物成打掃興福の衆徒額を奪り清水法師額を破りくを失る
法盛令武士弊園白基房と車

永萬元年七月新院出せりて天下諒園く浄穢之堂今もひき屋をさ
上人の被も突々をみる人慈傷の思ひ同十月廿日故建春門院の浄腹は
五葉みるさるの皇子は親王の宣旨と下され同二年八月政元有仁安とい
今年十月七日高倉院六葉を春宮は立布同二年二月十九日浄年七葉を
浄昂位あり先帝は浄年五葉を成であらひ浄元後をた童より帝を太上天皇
の号辨めく漢家本朝を治ると人言ふありみ入道法盛のそくひと
新帝浄位は昂せり念平家の業をさく國母建春門院は政入道の小方二位
敏の浄妹さくさるの相國の公達二位及の腹は為人の浄外戚さくはく平

平家白基房公
平家の侍士
狼藉小舎
車波摩



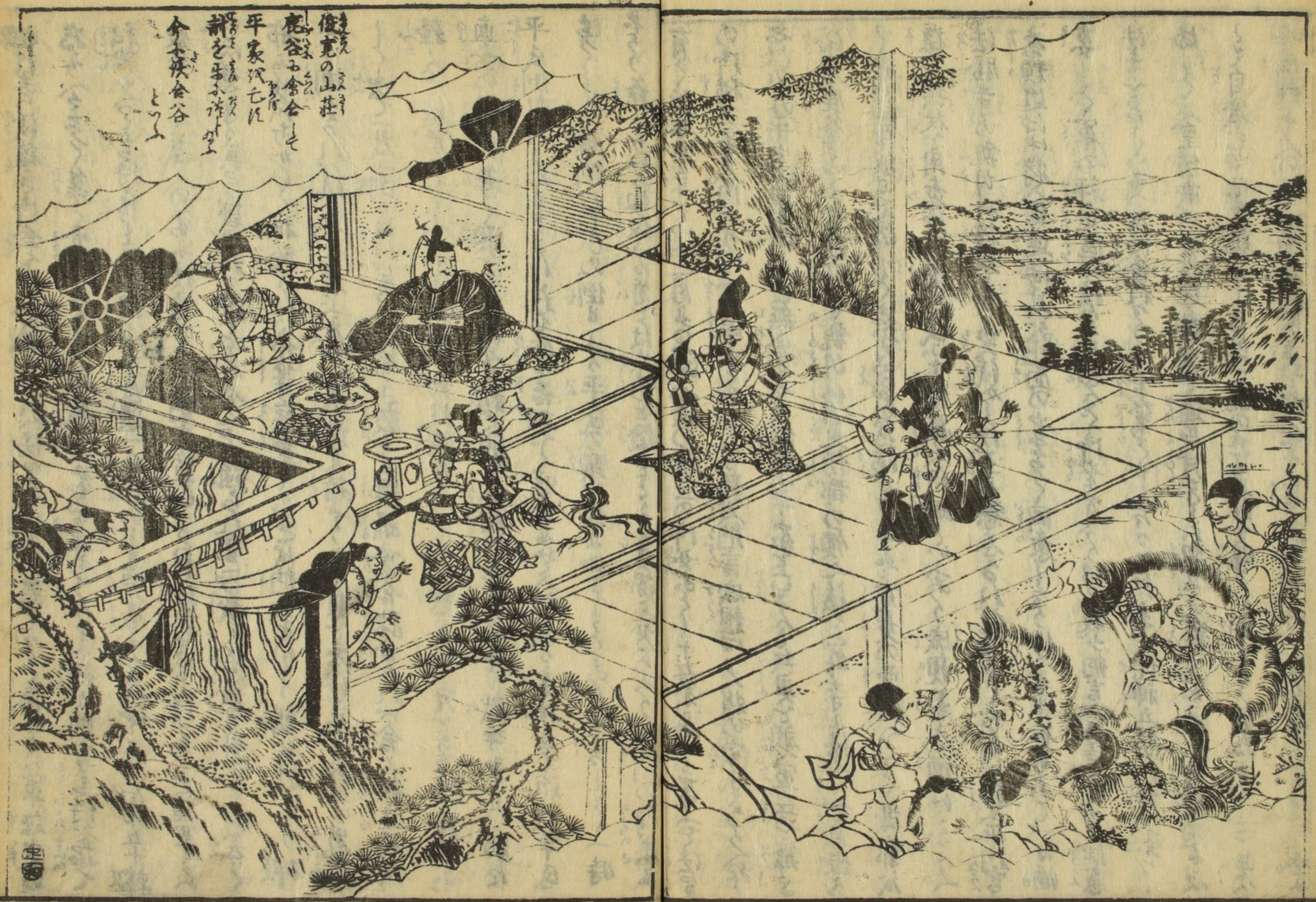
洗盡るんと強心執りて入道の空うそむひくそ恨みたる

鹿谷密謀

嘉應二年正月日 主上御元服有て十三日朝觀のりきと聞ては法皇も
女院も喜しくたやふ待やせのひたり初冠の御安最教く華の山の月のあが
ぬく蘇の蘭れ白芥々々るも似せのて特改の年れ姑の御奉るんが今後賀
てて飲あつて折朝觀のりきの始むり漢高祖位を仰あひて後五日一度父のたはれ
家朝觀くまふ子の禮とるも侍賢者有て曰た廿二日の日かく地もつれ天子
を高祖とせられん人主とて父とせられん人臣とて人主とて人臣とせられん
其後高祖朝觀のりたる門下向て高祖とせられん人臣とて人主とて人臣とせられん
我ながらの賢者や有かくのめ其言理も申さる争賤身とて天下の法とれんと
そふいさる祖とせんとおとる事成止らるれ重恩の父とおとるたあめをそと
尊く太上皇の尊稱とせらるる祖とて賢者の言成感しく五百万の金と賜ふ
我知る帝王の父と太上皇と号し朝觀のりたる縁之今年四月廿一日改元

有て承安元年といふ三月廿日改元の事二の御事あり十五日来りては法皇
の御猶子と入内あり中宮徳子と参りたる新大納言成親は人將の官もあらんと
その外平中盛も然り且無念もあら竊小平家とてとて兵具と調軍兵と略さ
洛東鹿谷といふは法勝寺執り後寛保都の領之後とて并寺も後く如意嶽を
くそは洛陽遙るを渡りて志を成家成隆らるるを寛養の要涯とてとて謀奪は
攘く兵杖と用意は揚州陳氏も多田藏人行綱といふも成親も頼けかへ
法勝寺の執りは極然りて法勝寺の成親も頼けかへ法勝寺の成親も頼けかへ
倉前近江中將入道遠海其北西の事多く同意とらるいへ鹿谷ありて二月酒
宴く軍の評定區は法皇も多と御事ありは故少納言入道信西の子孫意
法皇と御くいまは信含れり法中納言と上りて君におは比神立代の御事あり
ゆりく皇徳歳の寶祚と跡の逆臣持もいふ怒も天罰と當りて兵略と廻り
とも自滅七で今年疑り一日月一氣のたは其罪と悔たり明王もいふは
今成親もいふは為人悩亂の災と指今年豈天地の心も叶はか全政道有徳の基

俊寛の山荘
鹿谷子舎合
平家沈亡
新を平家子舎合
命七溪合谷



此はまは後醍醐天皇の御代に於ては法皇の御代に無ては鹿谷の軍謀定の
なる人多く集りて其の事多し田舎人の言を信ずる者多し新入納言も侍に指て
松若らも侍に指て置く程長く長瀬一合極の上早居り其申より白布五十端
取出し蔵人の花枝並せり大納言宣ひたる日頃談義中侍の事之將軍も
一向憂なる其弓袋の料進せり今一と強らば蔵人居直り畏て二は春く
布もみ成りかけし押除けし希等立寄りて是は納言むせり鶴尾指り押
しつゝ團まの洗且書もなす存し用意も持たり多事度けきり物り先烈
しく吹て二は倒れし馬も驚き難き驛陣合路合たり各人報馬成
強んと度承上と下と少くも馳効に酒宴の人々も興さるるをさるる瓶子小
直垂の袖より懸く頸にそち折る新入納言成親つまは成りて戯弄事乃初に
平氏倒れ侍らぬと云れぬを面を相と嘆壺も入れぬ多事頼立て近代平氏
多くし倒れしひぬ倒し平氏の頸を取らぬと云ふは是れ上り一時
をり森よりけり相叙する者とは大徳を信せり多事頼之成りたり樹門の標は
をりし名を大徳の標馬帽子掛を懸けたり是れ成りたる壁馬あり其の成り
事と偷ふを危難懸し頼成りて上の成りたる多かりけり

源三位頼政以妙策免難

近藤判官経経といふ者あり加賀國の月代も建されたり若川の涌泉より瘴傷
浴し瘴傷し討乱入りかの傍に遊上り其湯も身も浴難く原も淋せ馬の湯
洗ひしむもさるるふりて寺に宿り経経も瘴散ふち擲せり敵も解経
之も憤りて若川と攻め合戦ありひり若川寺の本寺白山三社八院の大衆
患難記し都より一と北畠山もせり山門と一と一と仙洞(慈濟)中なる
其沙汰り取上げたりふりたり成り山門の大衆議し経経も流罪も處せり
て一と一と新証もたたりて裁許ありたり故山王の神輿振りてまふりて
深まぬ家の武士も多し四方を防ぎ源三位頼政も終三百騎をのりて北方邊門
縫衣陣と圍りて大衆も多し成りて初も度一軍勢あり頼政の圍りて多し神輿
と入るる頼政も馬より飛ち申せり成りて神輿も多し神輿も多し神輿も

皆々かくの如し其は頼政より大衆の中へ使者とまきこみ及山門の所清以理陶
議論さるる所哉とて神速入るる事子細及及にされども頼政を奪ふべく固
得に其のゆへに入るる事所より入るる所山門の大衆目より頼政より入るる
後日み承事の事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
み加らるる又防たすんとされども醫王山王の所罰も怒れぬかぬといひ是といひ
の危難去るる然に東の陣頭より小松後大智と固を更へ頼政は陣より入るる
中へ入るる事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
法師といふ者ありあれは二の中務具平親王七代孫民部大輔憲政の子と陣頭より
中々大内四方山門より強く陣より入るる事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
弓矢も推して付く不覺の名なれども特にお漢の才人風月の達者傍り月く渡り
人侍も多し誠一茶邊清院淨位の侍もあはれ侍會深山見たり頼政と頼政と
深山見の具材もいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
かあうるも秀有はりう風流人をも首領山王も頼政も頼政も頼政も頼政も頼政も

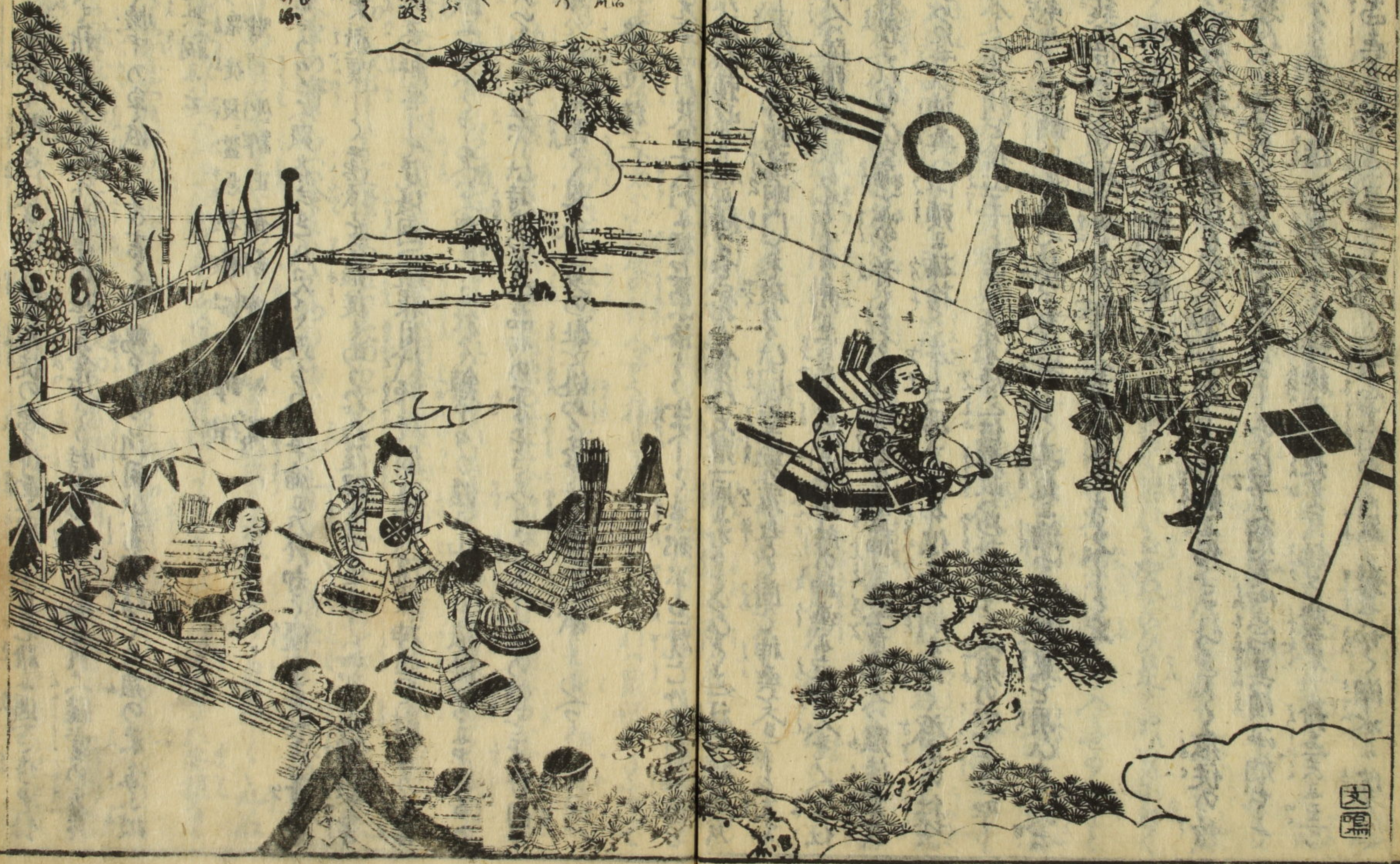
深山見の具材

多し外へ頼政も快随をえんと頼政も頼政も頼政も頼政も頼政も頼政も頼政も
昇出東面の心の端陽明門を破るるは門重盛の軍をも固く神速とまきこみ
大衆神人陣頭と押散らるる事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
も人射殺されりいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
上とあらはれ神速の陣頭も振捨るる事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
入るる今も其所と捨山王もいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
危難免るる六韜の奥儀之教の氣流案も其氣も備てけ計策を用ひて
勢の氣も悟るる事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

時志廻智通鎮大衆

山門の大衆と鎮人宣旨成りしと登山とて一と卿もあつたつと頼政の移
起るる事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
あつたつと本心極く勇るる事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
まきこみ出立るる事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

山門の大元
日吉山王乃
神樂を
振く
騷擾する
源三位頼政
謀をり
内裏の
地門を執る

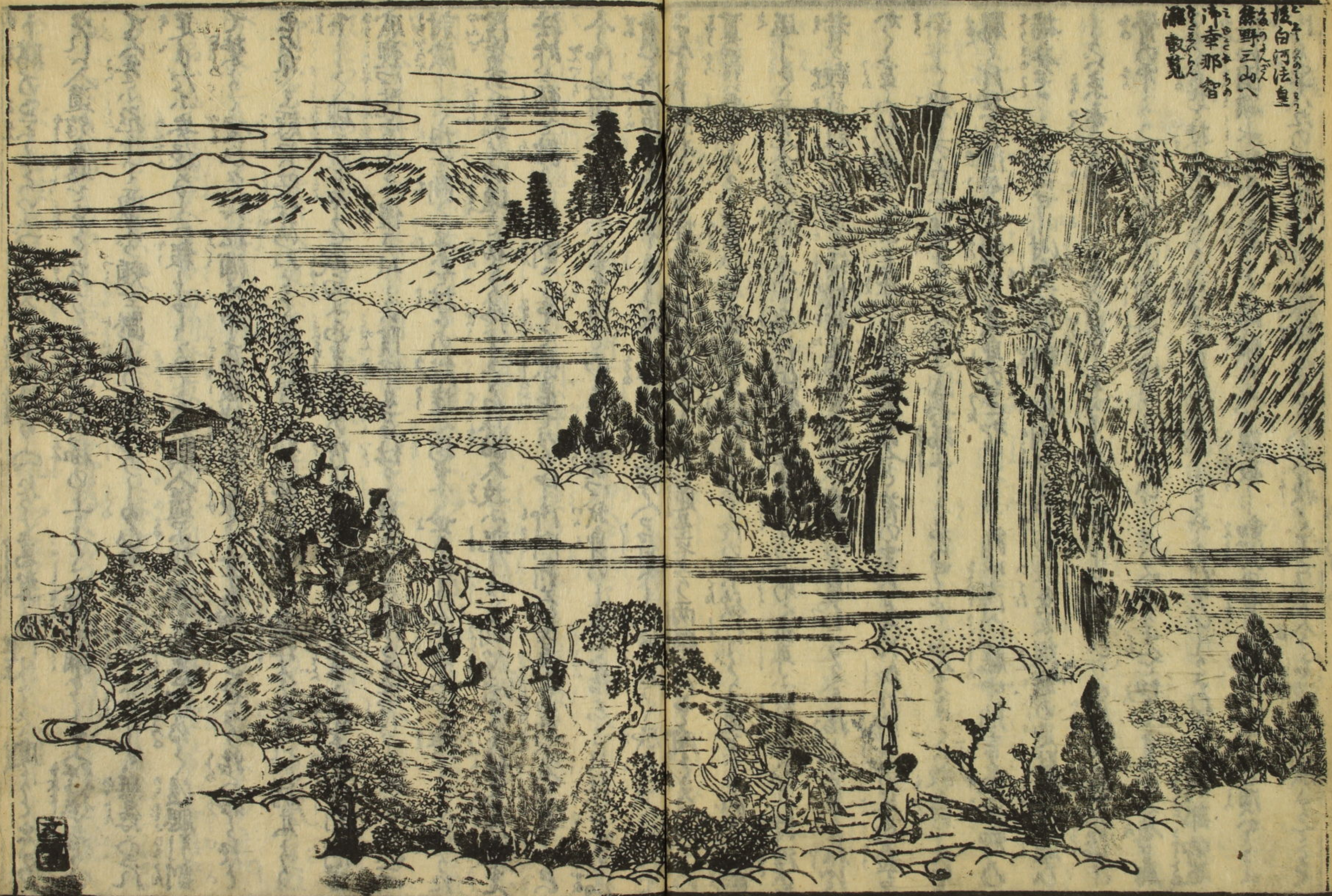


南へ法和院小二條款を履ハ二条東洞院之三条宮の沖子た小藏宮とトナリ
昭宣之の堀川殿之炊師門冷泉院中津門の高陽院青平法皇の皇子院水親
三位の山并後鷹司殿之炊師小洛の鴨居殿六條院小松殿公任の六條院
良相之西條良明沖子の西宮之條良相兼兼隆院神泉死勸學寺院設倉
院東三條通清院之堀井中院小野宮之嗣子之南院小野之神紅梅殿梅苑苑
高松殿中督宮子孫殿批把殿一院系極殿海橋立且至ナド一字もはらば焼ふるは
具外家々殿之儀思ハ内殿付らるれば兼隆門應天門會昌門陽明門傳賢
門郁芳門之儀兼兼家殿之極殿兼兼樂院大遠垣龍小洛殿上小庭延喜殿海目系
立板動橋諸司八首と云ふも焼ふるべぬ樋口富小洛と云ふ物遠み乾と云ふ車輪の
物くるる炎内裏の乃手焼ひたるまれば只事其あはれ日枝山より多く焼ふる松木火舟
持下り京中と焼拵ふる人々の憂も負てらるるいそひ鴨長明方丈記も詳ナ
かたのいん

依行綱新鹿谷密謀露顯

新大納言成親卿山門の際初より謀殺のまじり止まりり多田藏人行傳
子袋の料の白布と直出小侍より裁縫師より裁縫師より裁縫師より裁縫師
めぐる一今平家の繁昌と云ふ事西時頼朝と云ふは裁縫師のかつひ中軍去り後
るれ由るは事々與りて裁縫師の裁縫師の裁縫師の裁縫師の裁縫師の裁縫師
大切なれ他のいりりゆぬ先みと云ふ五月廿日西條推番一これ入道及福永下白
一同じ七日藏人頼と上福永下平相園一見系一院中の人々軍を頼り
事一和りこれ作中一人居きて密小私語と云ふ鹿谷且會合一謀殺の企め其
人々且新大納言成親の父子近江中將入道及法勝寺親行後寛平判官兼法親
法師之平之義重の起りて頼朝密謀を同謀討と云ふは院直と云ふは
も所寄の事新大納言兼法下所練下たるふよりゆき止せり鹿谷の密謀
の疎廓へも兵具と調の事と定つる事人傳且聞るは謀りたり細
もくも所効和忍りてい内々考ふるを進と云ふ人の言言はかたたるに
る一我思言と云ふの事一五十端の白布の事と云ふ密謀の事と云ふは

後白河法皇
蘇野三山八
沖幸那會
瀬敷見



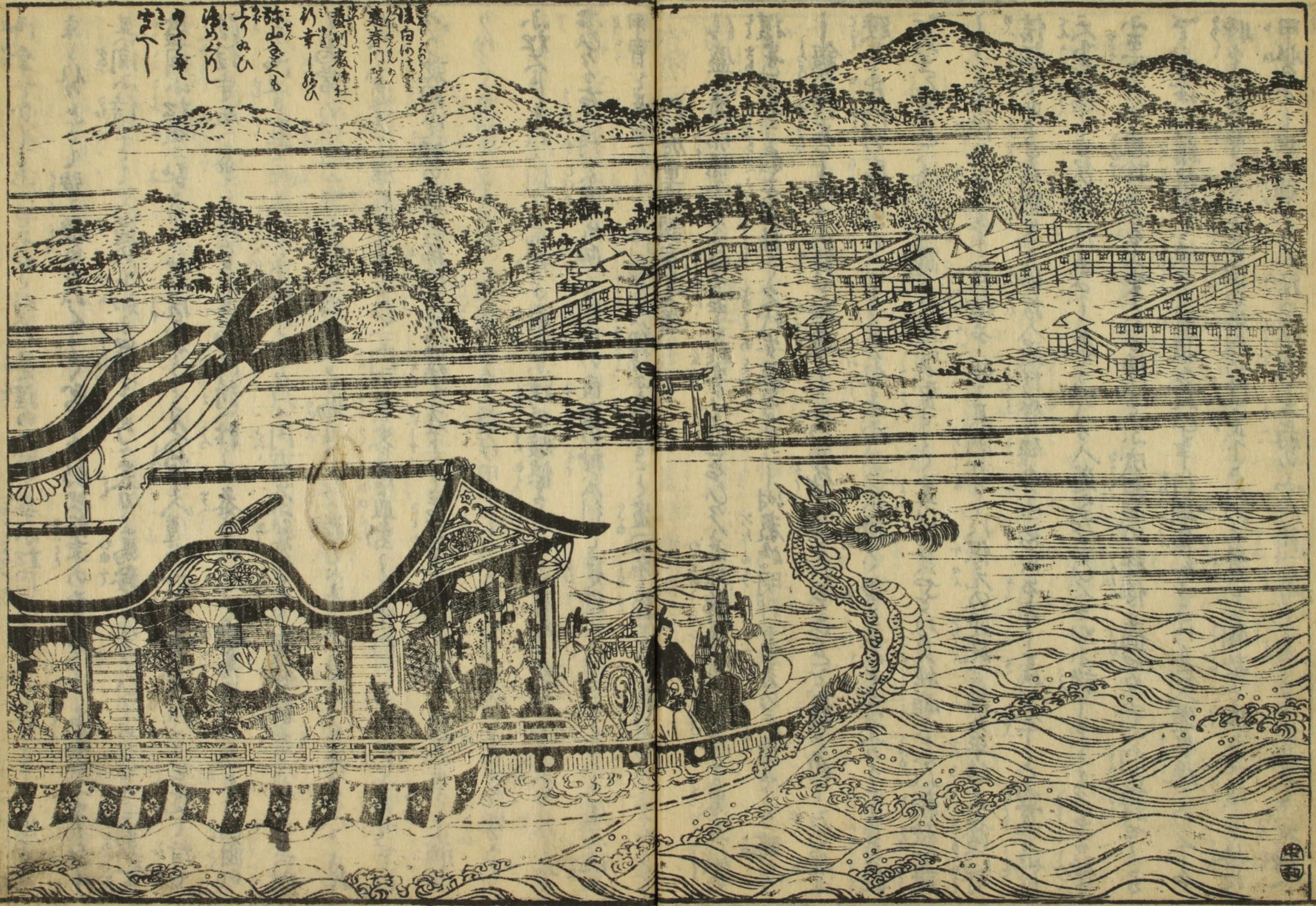
ト贈のらふといふは條の事と諱のつたうと爲聲ま外まゝと願うとせり
たへ入道作らば腹を立くお方うらうこれ極の上まゝに隔四踊をいへ
て大を小冠下り西光の頬と蹴り踊だういひたれもあまにかしも無爲のれ
足もだ不安振るる報ト下らんをたれ入道謀殺の致志相なる後臆引割
て禁よと宣ひたれ松浦太郎高後傍本も知く事の興とせせり始り知りた
まられども惡口吐ぬあぬとく有むさふ非後傍村体とあ常人と云れは傍本より
下りし硯をさるを紙面又西光の傍を言うる其言小親平別あ初絶言
成親に院宣とく催りしに院中もはる身とく催り遠背やつたは成親の
討滅し根と断く葉と枯との結搦る事あり世ありんとあやと與し侍りた
院宣の致かしの通し初より後まゝ白杖四枚小記しと判成をくはる後西光
法所が頼と踏く口と割く事と禁きてり中内門新入絶言の宿所ふ人と遣し只
今所後作し合とく事作とあま成親に我身の上とく宿志とくは法皇の山
着と所留のさま事とくんと車ふ事とく人召具し八條通く成とくん法とくを
要所が宿軍と元満とく穴野とく物事とくあんと傍歩踏く門の内入中門の内を
とれまど兵四方とく侍りし又絶言をて押し禁獄に留めり入道速ふとくふ
怒れまの押籠とく一向とく所小押入り侍の者も具醒教る成とく逃たり
其外辺の中將入道法勝も親の後實山城も友兼武都之輔政綱平判官兼頼宗
判官信政新判官資のりも瓜呂捕みと一向とく且衆も押籠る小松田も信を盛
忠入道の許も事と宣ひたる新入絶言とく事とく思ふ所思案の事とく六條後院宣
取季つ白の院小召れりり已本知く位と正二位官の絶言とく終より君の
所寂を淡く侍けんと忽ち着衣如らま事とく侍り兵都の外とく事とく事とく
下りまじとく侍者の所りも北野天満侍の対平之官の侍奉するて後家
の流し流る西宮之官も田新發意が致討するの山陽の霧と埋れる各無貴
るれも流罪せしゆみかこれ延喜の事と安和の所門の侍奉とく事とく侍入
侍り上りるかかくのゆり況や末代と事と侍奉とく侍り侍礼の事と侍奉と
めり侍る下り物性ある時必は悔まり院まかく侍奉れり侍り侍り侍り侍り

入道任り高野新川より著き一編は法華菩薩の勅を嘗て又由るは世交り望み
わびごとく恨しあはれ只誠の道に入らんとて重く入道せしむるは出家入道
まじくはるがたし將に教を授けしむるは世に傳へられしは法華の
入道の二男之位中將知盛の乳人ふ紀任次を著したる花の男の男はゆふま
み傳へて元と頼りやうんとありたりと入道用は松浦大希重の後ま作と其後入道
に引出さるる切母終斬たる婦子解きしを法華の丹戸向く斬りたり次男師保の
獄をうり引出さるるは天台宗の流罪ふせんといふ山王権現の御討るるを
首成切れり速く冥冥早急を不忠謀りて来ると西光法師も先世の業ふ
依りてあり有はるるは後まいりも憑りて因の當初有はるる頼と終りて平安城
七道の入口の毎ふ六體の地蔵菩薩を仰りける奉都婆の上入道場といふと
菩薩の菩薩と安をいふも七箇所一併であれと廻地蔵といふは幡里
四宮の京山科 菩薩地幡枝 西阪平 今伴 蓮臺寺 西七條 桂 送道村 今に
作齋廻りて毎來金會七月廿四日八老若群集と云

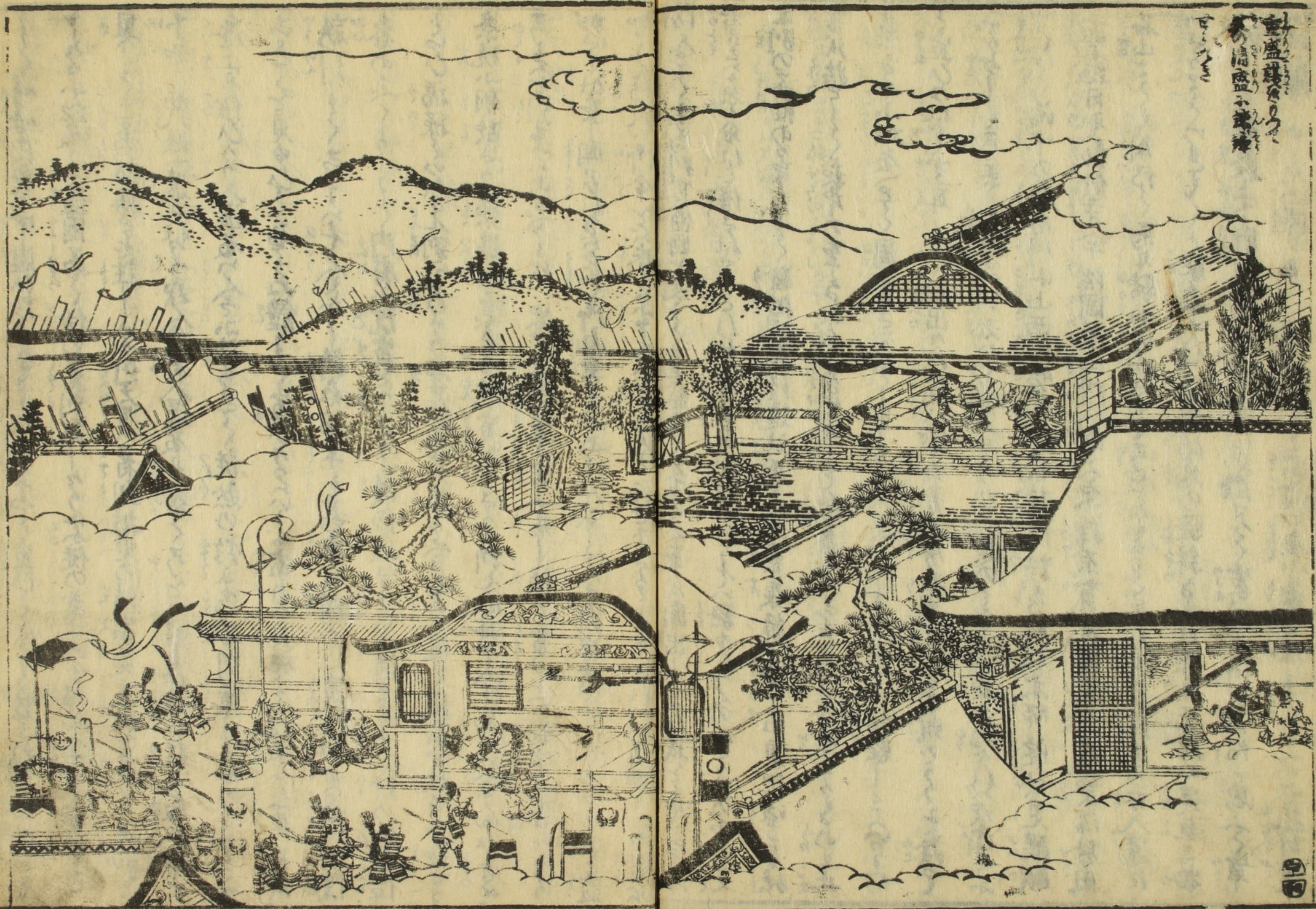
内府重盛諫言入道

信盛入道は加播小人の種をくば安んじたりと志地錦直重も銀やう思系誠の
撰書小あつる書重も括りて久代安重をうりて村家清明神重重の示現もう賜り
一銀の怪巻したるは針と秘藏しとるは松坂放しとてまじと靴をいれたの編
使く中門の扉出らるる其氣色ありては撥く勇々あてりふかるる高島貞
とりこれれは清重も入道嗚呼とて宣ひたりとて人負能健ふも几朝歌と誅
しとて位は回轉する異域奉朝ふ其例ありて保元の逆乱と鎮西平治とを
信頼下中も或朝もは振入道行骨碑身一忠公も人義と全くと密書と通け
天下と趨く君の清代もまゝ泰とせり入道たといふと不謀りてとて争ふと
小至まとも思ひてせり中入事あるゆへに不成親心の誹侮も願せりて一門進討せり
つと院中の結構も返さるる道假られば事行細苦ありとて且入道安重のあしや
時々した君とて一定進討の院宣下されぬと賢人の朝歌と成るん後と悔に
甲斐とて世と鎮中さん後には法皇とて孝服の山所一遷りまゝとる是又と我館

後白河天皇
遷春門院
藤原春長
行幸一統
珠山宮
上りぬ
海の色
舟と舟
まじり



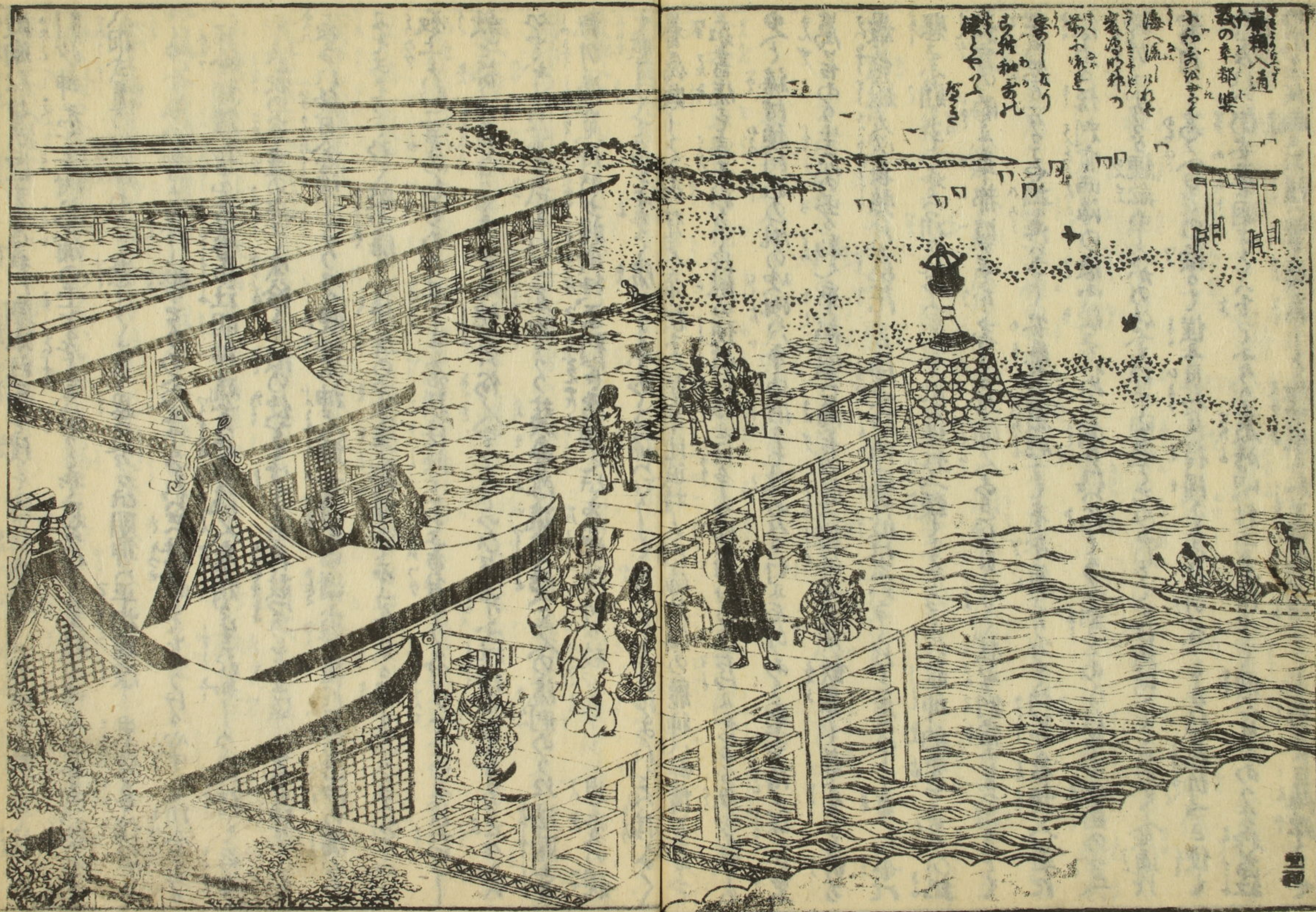
しつと伺ひ極むの意りと進めしとよくしつと極むを君とくゆしとんか
乱國の基とある向法とくも亦解まらざるは一々の煩も亦かの大率一定物基と
骨のたれど人合せとやと存しと使者の進もはるふらとやと進ま作とやと宣ひたり
小松殿の守の右之將家盛より上之檜原軍よりとら入道の言と國のひ雙眼より
渡とくしと流と極し物とも宣ひた眞眼とましくは入道と又物とは一門の殿末と
無とまらとせは上之軍とみふ懸しと畏る内府御有と直衣の袖よりと紙を中
落と極とが拭ひくやとけらるる我朝と神國と之照と神の所齋國の主とて之思
根今の所末朝政と補佐しとけしと太政大臣の官小界とる物と小甲冑と看とる事
容易かたは神出家の所身と之の謀併解脱幢相の法と脱とく忽とる若と市
しつとたる車内と流と破戒無懸と括外と又仁義禮智の法と背はとけらるる
賢少旁思たある事小他と結済心鎮と盛とやと各灰具と聞とるしとつ世に
四圓とや本文ありとつと大徳の恩とつと國土の恩とつと父母の恩とつと衆生の恩心地
觀經み脱れしとあはれ知とるのしとく人倫と知とるを必く鬼畜とけ其神とをまた
朝恩と善まの十王土と非とつと事かと事土の法王と非とつと事かとつと事か
顔川の池も耳と濯ひ首陽と下殿と物と皆も初と背た路と濯と成とけは多とつと事
かの若漢の蕭何と勳功極ふよつと官と相國と界と劍と帶と殿上小界と事と許と
しつとも教と示背中めくしと高祖とく禁とく廷尉と下しとく深罪とけしとが中
ある先蹤とをい討とるも所身富貴とをい意たつと朝恩とつとを極しとひみたる極
おしましめはしつと運のそる事と疑とるも母妃は富貴の家深しとつと官位を奪とる
程再び實本其根必傷とつと心細とる也嗚呼國も道無しとつと富貴耻とつと
古若くわつとれはも或はつと命とく私とん世とつと只速と頸とめとれは
只も人ふはけとれしと評み引出とれしと盛と首加加らとん事安た事小作とん
是といはは給とつと又直衣の袖と絞と練とつとたつとあはれ見聞の二門渡と流
袂と海と成とる入道は説とらとつとあはれとつと後頼の志とあはれとつと後頼
しつとけらるる今より世もいひ侍とるしと院泰も思ひ止つとけらるる上之殿と若と成
死罪も流刑とせとつとあはれ個人入道か計と事も全身の志とつと津海と平蘭



皇盛樓
の
景
を
見
し
て
の
事
を
記
す
云々

く嗚呼内府中違ひたる事やと宣ひて心も憂々の哀念併と
申る小松殿と盛國弟の信の書到記一々宗徒の武士二千餘人常々
果て二萬餘騎を註する内大臣の着到指見の後家貞貞統と
下知 西八條遣ふや人の着入道者み奉るやと漏見使甲に
奉止し作ひて入道者み奉るやと徒然の餘る板り道と
あまを更むひくゆる體と宣ひたるは家貞貞統と小松殿
誘引とくあまを今か所存何事と具意成得と宣ひ家貞貞
奉あぶくりと内府内院宣と下さる後信濃さる入道多
とい福祿とい先朝の考るる尊朝恩分なき事と還る國
条院小朝款と速進討と書院宣と下さる所入道日中
馬と引事とあぶくりと重盛今官居と祿と食上と勅定
かへし事團と定て所相書とあつんとせん守護と進
かくて信の書命と奉と申す也作んとせ下さる入道興
清く備はるひしと宣ひて宣ひて宣ひて宣ひて宣ひて宣ひて
とくこそと宣ひて宣ひて宣ひて宣ひて宣ひて宣ひて宣ひて
は院宣と軍兵の中小松披落の一定の事と中府入道と
申て云れたる家貞貞統と弟は皆りぬけ出家入道の身
か内府と世と讓りて上と向後物と院宣の所送事
よるやと小松圖とて一と角と相計りて思ひて思ひて思ひて
ひと小松圖とて宣ひて守護と伺候とて一の信の書
作らるやと入道の信と思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて
原下と採る意と宣ひて宣ひて宣ひて宣ひて宣ひて宣ひて
定ん家貞貞統と實の勅定とて争りて又向ひて無道の
入道及遠勅の振振と鎮よりて下の煩と念と人の謀
せれく五逆罪の一と犯する事とて懲りて懲りて懲りて懲りて
又の命と降ひて命と今又向ひて向ひて向ひて向ひて向ひて

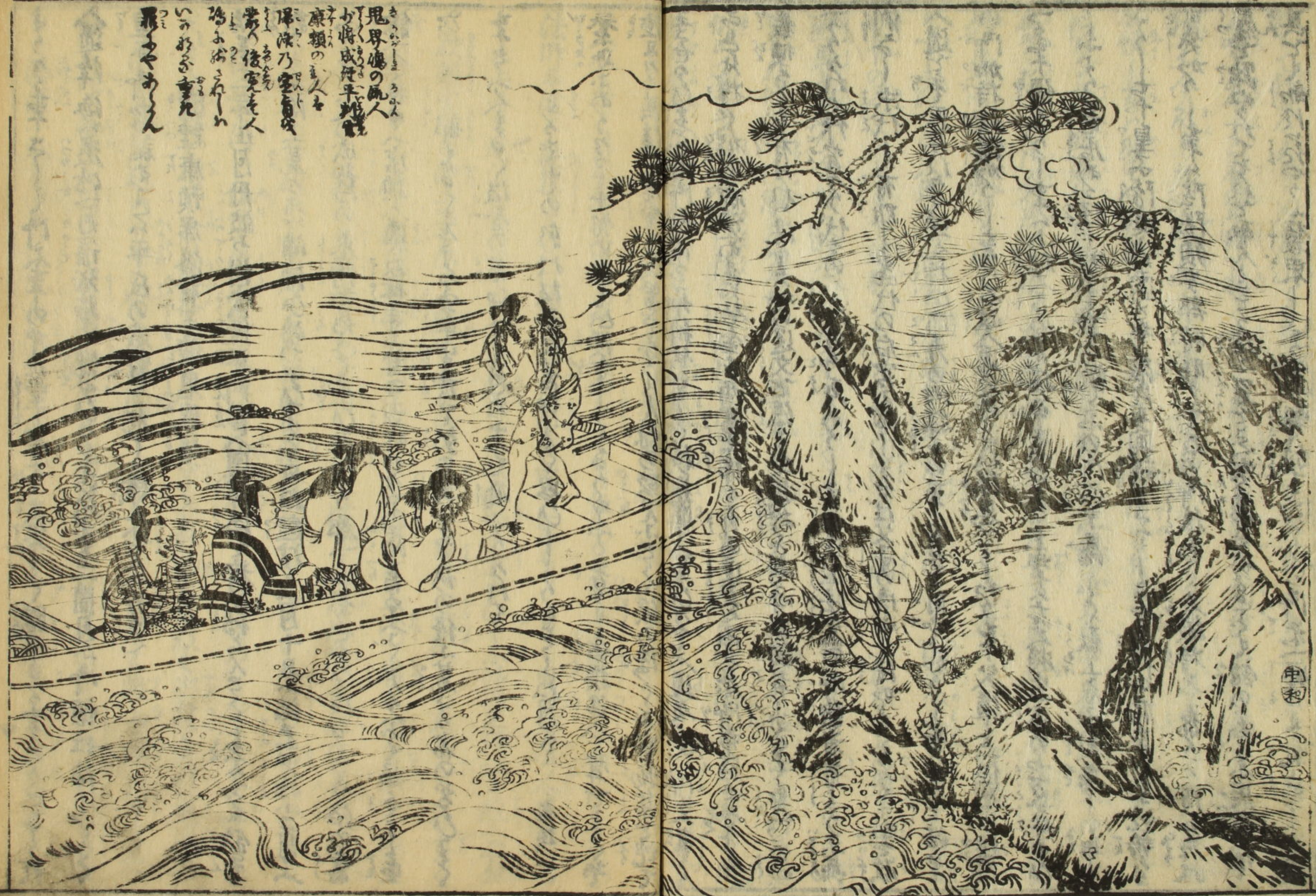
よく出家しあひたりねも後實修都入道唐頼丹波が將成経薩摩國鬼界嶋に
流刑せしむ抄薩摩傳とい物号うく鬼界十二の嶋とまほ五嶋七嶋と名付
しり端五嶋の目平五徒の唐頼法師とい五嶋の内十嶋小抄遣る後實を
白石嶋に於たりい嶋は白波を多くしく石自白し故に名づくとい丹波が成経
とい奥の七嶋の内北道の山硫黄嶋且そ捨りたる為常の流罪に悲しき道
とがうぢらぬ故にせとといひくそ為よ長と備へたるも途途み暇と先まは早ゆくと
と歌在馬里中心と通て在終み還らん車難いあひひを洛遠山の遠る航とて
表後神成経と或は海岸孤苦の出る加且臨んて悲烟肝を焦りたりとてね
憂憂後悲しむ深夜の月朝月ゆつけきも悲しき遊文鏡目且切久函谷關の分
野三ひゆれ日教磨且薩摩國五着たり遠きや海上と漕波く嶋くみそ捨
らまはれは嶋くおほけりもそ人の通へ来もさし住じんを休くくおの月く
あつ老只は上の人も思はれ身も毛長く生くもさくく牛のめおひ
来し圃ちりて男の鳥帽もも者に女に髪も梳けは止の皮と纏く偏鬼のめ
眼も遮るの燃上る火耳且濡るののぼる雷の音肝心とさるもかろるれ一日
斤付も堪くあふたあてせだ賊の由も耕され足栗の顔もく園の余葉
と取されは縮減ののも更かか首鬼の怪おられ鬼取嶋とも名付たり今も
硫黄の多かれ硫黄の嶋とやる丹波の岸も着りしれはさしやかす悲しき
ふ放たれも憂目有ん車の罪の原とよと歌のひる故郷も跡も留めい嶋のあり
さると傳聞くも悲かりらん憂愁るれと貴なるも表るれい今初この嶋
ふ別とくも捨られりかの海上島荒とく風凜とるる雲の流煙の波も流す
唐頼瀛州の神仙は嶋とく石の乗るありあはるの傳れ舟も憂いまも
かうりたるせりて人そ助かたあは悲しき車も憂車も互に語り心とて慰んだ
傳るる海と隔く新くふ泣きも車憂愁るれが將成経の門脇宰相と訪ひ
ゆひたりも故人とあはる老とる傍都も入道と特小悲しき人そ哀しかりたる
後且綱舟釣舟も成たり腰とらけは後實も唐頼も硫黄嶋も一も書合る
成経も唐頼もせりてあはれも慰む便とやと浦も嶋とてんらるそ都のあさ



瀬戸入道
の車都樂
小和の松きと
海（流）川を
巻海の外つ
あふ海を
あしなり
ら新和を此
徳とやう

十日待賢門院平壽の例より今を鬼界の流へ少將成経入道康頼と稱し
諸國を巡り七十二人中を宿せんが同年十一月平壽の氣は十位を二位後
心若く思ひのゆく一条度橋車と遣せし橋成は其時十四又計の亮也
十二人あり東へ行く是れなり成呼と同者小摺り何の摺を國王の摺を八等の役
の役を摺り四返飛りて橋成は東の方飛せし其時十二位後成は其兄の
平大判言内忠なりかしく侍れし是れ彼の事摺を心得し國王の摺を王太子
ましく侍り目出度申すを存し仕を合はるる八歳なり西海の浪小沈り
と金の端路の役を摺り思ひのゆくは條度橋といふ昔安部晴明が文
の例原を極く十二神將とい橋の下小児一ましくまけり吉山と名す十二人の童子十二
神將の化現なり一又二若流行たり時子の淨威貴信父不違なる慈を葛城と出て
入浴い橋成にも早父の世に遇へ信と傳へ橋上小並肝膽と推し念流成は
大木の神祇と稱し遂に児力陀羅尼の徳よりいへ焼羅王界に徹り父の流り忽
橋成は淨威流と流り父と抱えたり名流り世人度橋といは流成の
名橋と稱し平家の一門の御自ら下へ御者上人馳参り法皇も御参り小松成は
例の若事なり是事なり強も強の中事傳りまじりければ一月間と公達引果し
参りあり最のまはるるまじりければ推亮が將維盛左中將流経頼侍從資盛
が遺跡あり馬干足金千兩南條百斤御銀七振御衣二十領とてをまじり
是る二位后大政入道といはれ物とも覺せむる人の也パーカれともいふ
かくも徳成りとのま宣りたりも體成り馬小素教の陣小相参り軍配あり
よもかくも徳一なりとをいひあり新大徳言成親は法性寺執り後實西光法師
が先靈生靈の物成り撮との車P者のありし平成は其時なりと入道二位后
共いよく魂成消心成碑なりは故小撮との神頼とまされは其時なりと運小
村別押橋りたる神驗者面々小僧伽羅の句共成上り我寺との二寶年本成のなる
責伏なりは振鈴の聲大内小滿護尊の煙虛室の上りたる惡靈邪神も争り
藤身成成りともいふ法皇も神几帳迫りまじりたるを成りたる成の
か下けり小身毛堅感涙を流り人ありり初定といはるる物氣なり老法師

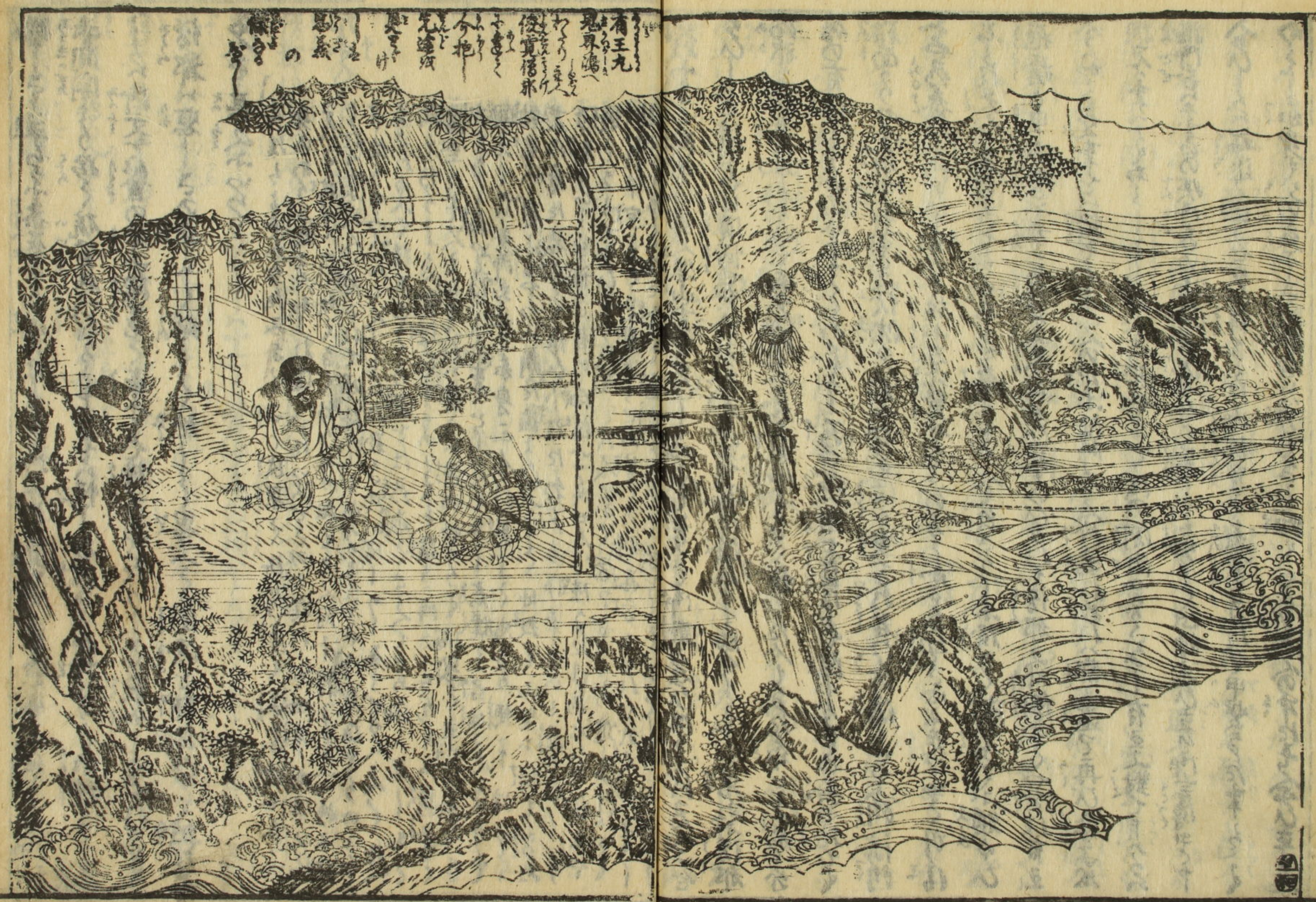
鬼界嶼の風人
が將成陸平地
原頼の主人を
澤原乃空直成
衆人後竟も人
為ふおそれし
いかに重死
罪をあらん



かよとてとも賢は主のひつとみんを谷み下る裏渡り水み神と濡し履不中てはね吹
風み身も被き涙と流して休ひたる去程の位へと覺しして其の皮を脱ぎて顔
小き赤裸しくむの如かた身も毛なく生く長三七尺計なる者ぞとてあは
有る事無くしていづるは信ふ法持る執り信都の法房ありまはれ初と信やと
向たりは只ちんを計して物をもとせりたるは法持るも執りも争知りこれを各
さるも理なき空しく成るよるに甘んじ其體を信持る形見もとるもは志の
甲斐ももるに法持り信たれども信く虚く都下りん樂しとてあはれ初と
山格も入るに主ふ仰る人まきと立交りたるは浦洛と違ひありたれは後
あより歩む者あり其形をみる小童かた足は年老て法師とて又髪をそら
さぬ生上りく白髪長し身も薄膚を付たれも拂ふもえんは頸細く腹
腹れをきりして足も細く人かた加たたたのよも小く魚を把り腰まわり
ふれ布を取纏く力もあひと有るは信りてあはれ初と長衣主君のかくも成る人信
と名鬼界信とては縁鬼道も隨獄しりたる人殊ふ近家一氣に信り二人流され
あつた人去年許さぬ津洛しゆひの信も人知るるにわくたりまはれ初と向
たり信都顔も憔悴形容枯槁するも我こそ後實を名おんとすは胸おせたる
涙の信もなきも思ひて愧し心とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初と
生真と持たるるしてさし只あつて信よりをさしとてあはれ初とあはれ初とあはれ初と
たるん信りて足も親も都もあの人をたれんは信りてあはれ初とあはれ初とあはれ初と
悲んを波湯と違ふとあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初と
一圓も一懐もあつて持る魚と後一投おく事と上は五尺いりてあはれ初とあはれ初と
とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初と
子も信りて故郷もみかえはれ心地もいりてあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初と
慈傷のあつて其時をも有るも信りてあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初と
外もあつてあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初と
風波もあつてあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初と
強不見遠くもあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初とあはれ初と

使のわたり見直らざる所存様幻とも賞みのさへいふも服の報しくかく御せゆ
らんとく傍那の顔とつらと身は此雨をを座居る傍那を記上り位々
宣ひたるい時運る海中遠なき旅の餘るればおろけもこの通へまゝ一己が
兄の志まは定まらば訪下りてこそを堪へまると思ひし有まらぬとくある事現とも
おぼえたるわあゝんをい有まらぬ悲しき人思へたる者か足しは好たるは好と
諸も少將と利官入道との有は憂事悲事まのひつげは位は悲所首宿とて
笑川歌の互ふ慰しなち捨てし一日片時傍を下りとも思へりし甲斐
るた今の存く互ふ相見へる事の候しこよ如程の分所るれば何事とぞよたに
のこのとも都小詰りある一者との事か志も同くも思へりしは是れ一
とも心も何ぞの候るればそれ叶は是程の志れあつたるふるをいこそせす
同ざりたるを少將の定け付は何とふみの一は傳りたるをいし恨まか心地も
宣ひ有まらざる事もある君八條をへる巻を後へ所あつたの人をば上卜成
まに捕捕り獄舎へ入れ奉財を懐取らると思へる一辺男の人をも思ひくに
おれ小方も鞍馬の興と悲山おせゆいふゆも思へる御敷の思ひはくははくを
いひし其積り月頃悩むいふが去年の冬遂にはれしははるしと思ふ思ふ傍那
何事と妻の甲をよわく成ゆいゆ小を慰便もしく親したるは思ふ思ふか
傍の有様ふことその今もくもわたりしおや悲し流若昔とて思へるも其不徳も
難向りたるを命かかると又伏流ゆいたる有まは重てお君の父の御せの所は所
とる及番れはゆいゆとも故小方穴賢せりこの方とこそ思ふ幼き心も在りしは
とるは是れ事とまをともくをを番りたる人も思へりしは思ふ思ふ思ふ
抱痛し申す傍那去る五月か又思へるゆいたといひたる傍那又対面しとて
今もかゝる憂事とて語るとよ二人の中は法師を人捨置れれば都も還りて再び
相見えまへともわたりしゆい今も語るとは後の測測ゆりたるも一有まは對て
傍那おはまゝの候所あの許許みはゆいといふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ
いひしは端近く出さるゆい斜るは所況有る夜女の身はしく甲斐もたすとも
わたりし身も父の意も思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

有王
鬼身
俊寛
今抱
先達
の
の

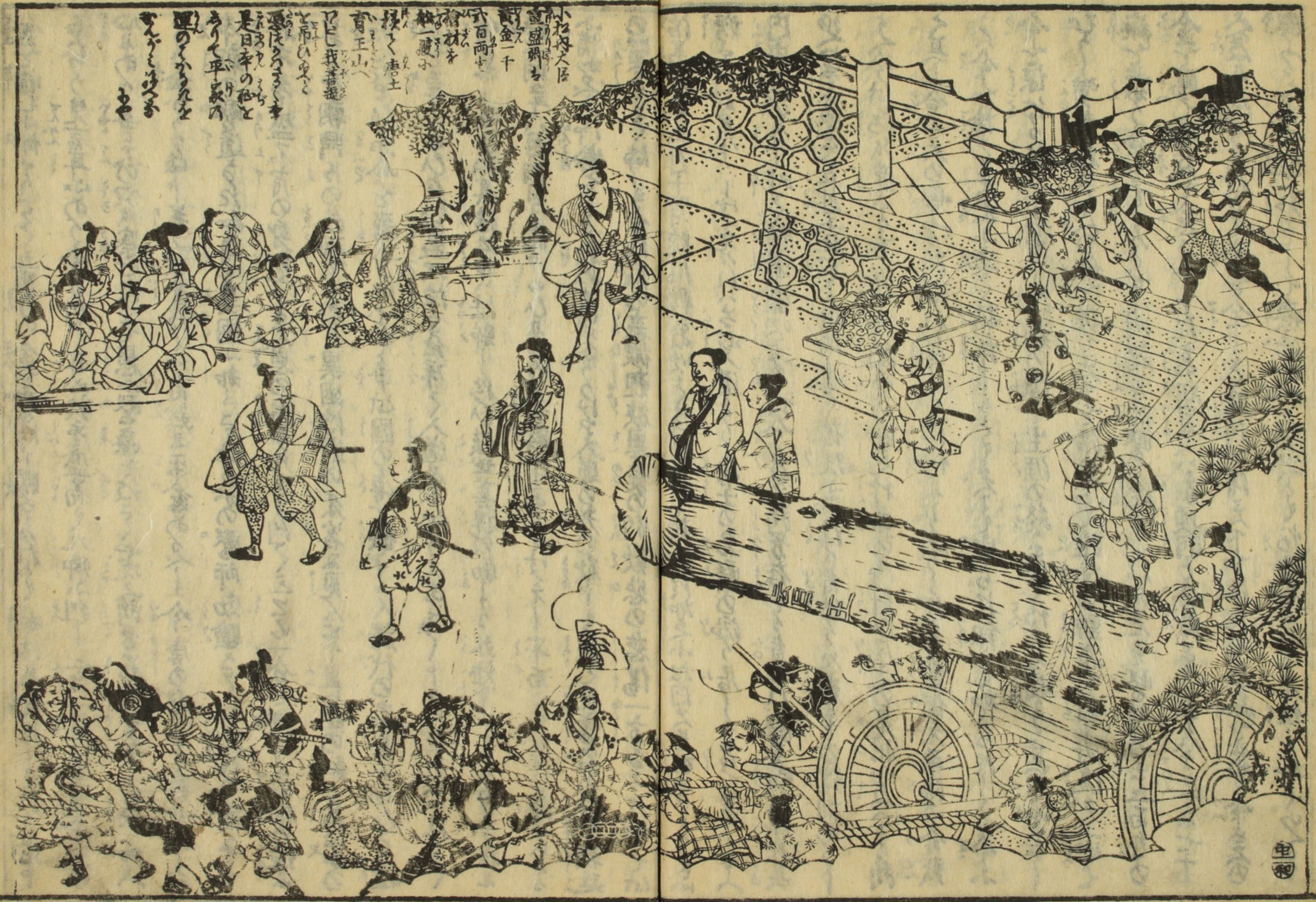


悲しむ車斜らばらざるをのりて相違なく無難と有まらるる所なり
しく神歌の趣もほろやうもさるるひくも現も紙もさうりくも所を車
へ作らばと細くあうく次々と語らねて唯も涙ももともも宣はばあけ出せの志
ありとく有まればと高望の聲もその別ちのいふも一果も身を其動もく
相違なくいひく真言のり者も成く父母の善業を吊るるを殊勝も有ま
それより高望もふと堂も奥院も骨を蔵り車都堂を立く布出家して後世を
吊ひたるをせせえ一接もふ有まと思はれ後石のゆへ主君世もあつたるの
ふ命と於あつた我場も除て死と願する事もふかこれ其身の利禄を得たして
子孫の業もさうりて其身の功名も成りてことこの対も思はれ我も守り安
うとく有まと思はれ世もた主と痛も願するがた思界も遠くもあつて
主君と育もる車揺らした思はれあつてことこの事も國史も述と
賞せまらぬのりく

小松大信豊去度青玉山黄金論

治承三年二月十四日旋風野吹く民屋多く轉倒に加之小松内大臣も若く目
撃ありとらた一守をなれは古政入道より唐土の名醫の海り居るを召て運り
内府病の床小外之使者盛次小直もいふ方の新考存も有のれ醫森が加は其
処も盛次も五月小松也春清も推現も移る有つた教書の瑞相あり
う今公病が受る車昂所納受の驗之神画の所計ひ凡まの是北も及はる所
く其上命令との與つた所も必しも治術もよりくはる盛保も平治の合戦
も命令と捨て夫も小立も捨舞ももも夫も中らば叙もかからばも今も
命も保ゆるはるかまも一期の限も生涯の終もも其情も其甲斐も
ひく實も祖もこの人の劍も提て天下と治るも淮南の黥布も討つ時流矢も中て
疵も帯り命令とせんとせし時諸名醫も違てこれかえんと醫師の云五百力の
金も賜も所も心も愈もるに高祖直もいふ項羽も合戦もする事八十年も七十
へ及も及つたれも命令と全くと勝利も得天下と治た今もいふ疵も帯り命令も
與つるも人の心も和もして療治も加つて何の益もあらん但しかくつくと

小松内大臣
 盛明も
 金一十
 百両
 松一殿
 様々唐土
 育王山
 戸に我妻
 是日幸の松と
 ありて平家乃
 黒のくちを
 せんがくちを



青王山の祠堂を滅びてその子細と奉りて八帝ハ平盛の休志に隨喜しく
一塵の銘有りたるは黙止かゝ況千金の争奪やと昂捨杖といひ實形化乃
伴利と創一五百町の供米田とあらはるる因縁青王の傍侶其志の眞實と感づく
初ハ息災の祈禱一々の盡しゆひぬすて日本國武州之守平孝盛神座と過去
帳を記し日々讀上るを昂捨杖とて下け其の妻のいぬ平家の運命をゆゑ
のこふ罪を世の人のたゞも悪かき延命し入道の積徳を宥りけりハ穂ま
めりけるふこゝろははりて上下一統不致なる

持より小宋國青王山一山小ね大尾其令は治され、車親治多一平家也保りも
二子五石兩あり井沢長秀の俗説辨るんを虚説するんと書れけり
大尾病氣を罹りて日本國の都を離れ異國の醫所へ入る療養を受け平家
の運命短きと覺し宋國、武後の世に菩提と稱んやとて一日日本乃
海より舟を推して去る一山を以て其の記す宋國武州之守平孝盛神座とい
殿謝ふ青王山一山阿彌陀の石經と記す國若導寺小勝とて今若多れ
社地あり又此模形の石經を阿彌陀の石經と記す國若導寺小勝とて今若多れ
の報恩に伴利と稱りて今若多れ國若導寺小勝とて今若多れ
て其金の恩謝の事い寺の縁起を詳し伴利の記し多しとて
ぬすけ

大政入道積惡僧長

治承三年七月七日申刻南風偏吹都々大虚忽暴四方園教の如く同年十一月
七日戌の刻之地表あり只今之地と歩送にゆく中賊賊と寒に陸陽察安部泰親院泰
一々麥圃一々のいぢの大地者占文の括新斜るにそく世今七びわるとり
以外の凶瑞とて怪しくとてははり法皇も傳奏も大不爲はりけり然るに
右政入道信盛の悪逆小ね大尾其令の後僧長一泰園と違ふ堂上の卿四十二人
官職正し追従らるる尚阿闍白太政大臣基房之松後とて右宗推神不移一宗案一流
一々同七日申刻南風偏吹都々大虚忽暴四方園教の如く同年十一月
資賢同子息を右將通家右將推賢二人と信濃國一流は同まは院も不七條及
と軍を三三度の如く四面を圍む事二三萬騎は法皇を救護あつと又惘させぬ
る早御車より入る右大將宗盛は泰ゆつ法皇の危よたれ罪あり事あき思ひ
よくつ主上はりませハ世務をいさる事而後天下の事いゆてそのあはれ
ば必し放り事ありとあり今自遠國へ還し人たるは鳴りて放て憂國をいさる事
とやれ龍眼より御相をく流る中宗盛も其も流るる事ありとや

かぐつゝせの人も伊勢皇を神宮石津也八幡宮ま日大明神持入君の優之石
 山王七社両石を重くも林果のり下更妖若致耐に夢怪若の小膳終とも中
 の待入は先非と悔さむひの民小敷成施一政務も私の〜と思入又入下ハ忽
 君の御代も立返と更使必水の池と清更今来疑を一御心つとをたせと青帝と
 勳やうのそと新慰所あ地〜と所陽續とあ〜と〜の〜入たり太政入道保元
 平治の乱所方と凶徒と避けと君成初より治承の今ハ勳功の威も誇て君成
 編〜もろ小波も流〜と配と覆も〜と貞観政要の文宣宜〜とや



源平盛衰記圖會卷之一

